

雨に煙る夜。

森朔は交差点に立ち、黒い傘を差す。

今は夜 11 時 30 分。日中は非常に賑わっていた交差点には、今や人影ひとつ見当たらず、信号機だけが黙々とその役割を果たしている。

前回、森朔の手下が、あの「霖」という男を捕まえたのも、この場所。

狂乱の一夜が過ぎ、森朔は霖の行方を完全に見失った。どれだけ探しても、その姿は見つからない。

焦りに駆られるたび、森朔はこの交差点へ足を運び、黙って待ち続けた。

「お邪魔しました」

一人の男がスーツケースを引きながら、森朔の傘の下へ入る。

森朔がじっと見つめると、意外というべきか、それとも当然というべきか、霖の底知れない瞳と視線がぶつかった。

森朔が軽く手を振る。

やがて、一台黒塗り車が二人の前に滑るように停まった。

霖は、それが自分を殺すための罠かもしれないとはみじんも疑わず、我先にと車へ乗り込み、助手席を占領する。

森朔は運転席から降りてきた部下に傘を預け、自らハンドルを握った。

車が走り出すと、二人はすぐに今後の予定について話し始める。

要するに、提案するのは霖で、森朔はそれに黙って従う。

「まずは君の縄張りに行こう。そこで少し面白い準備をしてから、僕の家に向かう。どう？」

「君の家？ 君は自分のことを悪魔だと言っていなかったか」

「そうだよ。僕の家さ。悪魔にだって住む場所くらい必要だろう？ まさか道端で野宿するわけにもいかないしね」

その言葉にも一理ある。

車はほどなくして、森朔名義のラブホテルの地下駐車場へ滑り込む。駐車場の最も人目につかない一角には森朔専用のスペースがあり、そこから専用エレベーターへ直接つながっている。二人はそのエレベーターに乗り込み、最上階へ向かう。

霖はびしょ濡れのスーツケースを玄関脇に置くと、中から次々と荷物を取り出し、ベッドの上へ並べていく。

その間、森朔は霖の指示に従い、部下たちへ連絡を入れる。SUV か、車内空間の広い車を手配するよう命じた。

森朔が連絡を終える頃には、霖のほうの準備も整っていた。

「まずは服を脱いで。おもちゃをつけるのを手伝ってあげるから」

「……どういう意味だ？」

森朔は眉をひそめる。霖の言い回しには妙な含みがあった。その先に何か企みでも隠れているように聞こえる。

霖は微笑みながら森朔のそばへ歩み寄り、彼のボタンを外しながら言う「次

は私の家に行くのよ、覚えてる？」

服を脱いで、霖が選んだおもちゃを身につけて、それから……霖の家へ行く。

つまり、森朔はアダルトグッズを装着したまま、変質者のように外を歩き回るということになる。

霖の突拍子もない考えを叱りつけようとしたが、その言葉を飲み込む。ふと霖と視線が交わり、その瞳奥に今の自分の姿を見たからだ。

霖の瞳に映る自分は、隠しきれない期待と興奮をそのまま晒していた。

なぜこれほど高揚しているのか、自分でも理解できなかった。

二人が離れている間、森朔は時折、もうろうとした夢の世界へ迷い込む。

夢の中はすべてがぼやけていて、腰や尻に置かれた手、乳首を軽く噛む歯、首に締め付けられる首輪……。

すべてが幻影に過ぎず、目覚めた後には果てしない空虚さだけが残る。

「今日のテーマは……服従。どう？」と霖が提案した。

しばらくの沈黙の後、森朔は「いいだろう」と答えた。

この肉体が霖を望んでしまうことを否定できない以上、悪魔の罠に飛び込むしかない。

彼は服を一枚ずつ脱いでその動きはゆっくりと、どの服もシワ一つ残さないよう、丁寧に畳んでいた。単なる時間稼ぎに過ぎない。

霖は椅子を一脚引き寄せ、それを逆さまにし目の前に置き、椅子の背もたれ

を抱きかかえて座り、森朔の様子をじっと見つめ。

彼は心の中で葛藤しながらも、手は止まることなく動き続け、まるで殻を剥くかのような服を一枚ずつ脱ぎ捨て、何の防具もなく部屋の真ん中に立ち尽くしている。

森朔はあの緊張と不安に満ち弱みを見せまいと必死に抑え込もうとする姿がどれほど魅力的であるかなどおそらく想像もしていなかっただろう。

霖は美味しそうなものを見たように唇を舐め、手を上げて森朔に自分の前へ来るよう合図した。

森朔はゆっくり霖の前まで歩み寄った。半勃起したペニスが霖の顔のすぐ前にある。

霖は手を伸ばしそれを軽く触れ、尿道棒を取り出し自分の唾液をたっぷり塗って、片手で森朔のペニスを支え、もう片方の手で尿道棒を森朔の尿道口にしっかりと当て、優しく力を込め奥まで挿入した。

森朔の体はそれによってわずかに震えたが、何とか声を漏らさないように耐えた。

悪魔の唾液は相変わらず効果的。痛みよりも、尿道に断続的に走るしびれるような感覚の方が、むしろ気になってしまう。

森朔は唇をきつく結んで、この侵入されるような感触に自分が好きになってしまうのではないかと心配し始めた。

霖は森朔の変化を鋭く察知した。尿道棒が尿道の奥底に届き、ぼうこうの入

り口を押さえつけたとき、霖は指で森朔の依然として興奮した陰茎をそっと揉んだ。その仕草に、森朔は明らかに身を震わせた。

次に、亀頭の下にある溝にベルトを巻き付けて締め付け、弾性バンドでベルトと尿道棒の露出部分を接続し、尿道棒が抜け落ちるのを防いだ。

最後に、陰茎の根と睪丸の接合部にそれぞれ1周ずつ巻き、尿道を締め付けて尿道口が尿道棒をしっかりと噛み締めるようにし、さらに絶頂時の精液の流出速度を制御する。

こうして、森朔の陰茎は完全に拘束された。

「これが、君が言っていた面白いことなのか？」と森朔は尋ねた。

霖は首を横に振った。

「それだけじゃないよ。これはほんの一部に過ぎないんだ。どう？ 続ける？ やめてもいいよ」

ここまで来てから断るなんて、臆病者だと思われませんか？

森朔はもちろん、断るわけにはいかなかった。

そこで霖はディルドを取り出し、森朔の手に渡すと、期待を込めて彼に尋ねた。「見覚えがある？」

森朔は無表情で言った。「なんて悪趣味なんだ。これ、お前のあれじゃないか？」

「一つ小さい」と霖はそれを訂正した。

ディルドに唾液を塗って潤滑させるのは、森朔自身の仕事だった。霖の指示

に従い、森朔はベッドの脇にひざまずき、両手でディルドを包み込むように持ち、口を開けてそれをくわえ丁寧に潤滑させた。

その間、霖は森朔の頭をゆっくりとなでている。

「いい子だね、いい子だね、その調子。さあ、肘でベッドを支えてお尻を突き出して」

霖は褒めながら、潤滑を終えたディルドを、森朔が高く持ち上げたお尻の谷間に当て、後ろの穴に押し当てた。

柔らかく、すでに激しく突かれることに慣れた穴に、それが少しずつ押し込まれていく。

森朔の乱れていた呼吸は、さらに荒くなり、彼はうつむいて顔をシーツに埋めて絶え間なく低い喘ぎ声を漏らした。

すごくエロい。

まるで、お尻を突き出して交尾を待っている雌犬のように見える。

このところ、森朔は一人で快樂にふけることはなかった。何しろ、霖のような特別な感覚を与えてくれる人はもう誰もいなかったからだ。

もともと完全に広げられていた後ろの穴は、とっくにきつい状態に戻っていた。今、ディルドに乱暴に犯され、少ししか挿入されていないだけで、森朔はすでに耐えきれなくなっている。

とはいえ、この程度の深さでも、霖が彼の敏感な部分に触れるには十分だった。

「うっ……」

淫乱なメス犬オスマンコは、前立腺の位置さえ普通の人よりも浅く、少し本気で弄るだけで、すぐに愛液がこぼれ出す。

霖は笑みを浮かべて、片手で逃げ出そうとする森朔の腰を押さえつけ、もう片方の手でディルドをさらに奥へとねじ込みながら突き入れていった。

完全に埋没するまで突き入れ、森朔の渴き切った腹の奥深くで鈍い音が響いた。

「うっ…！」

たとえ霖のペニスより一回り小さかったとしても、難なく最も奥深くまで侵入することができた。

森朔は体が震え、両足をどうしても閉じることができなかった。

森朔が環境に慣れようともがいている間、霖はまず荷物をまとめ、戻ってくると彼にその他の補助装備を装着させ、ディルドの先端に漆黒の犬のしっぽを取り付け、タイトなボクサーブリーフで固定した。

パンツの後ろには小さな穴が開いており、尻尾を出すことができます。体を動かすと、尻尾の付け根が挟み込まれ、肛門内のディルドがさらに締め付けられます。

穴が引っ張られることで、森朔が臀部の筋肉を動かしたり、膣でディルドをくわえたりするたびに尾はさまざまな動きを見せ揺れる幅もそれぞれ異なる。

霖は尻尾を握って、わざと強く外へ引っ張り、尻尾を二本の指幅分だけ引き

抜いて手を離した。すると、伸縮性のあるパンツが素早くディルドを元の位置に引き戻し、森朔の下腹部の奥深くを激しく突き上げた。

「うっ……ぶつぶつ……！！」

森朔はその一撃で腰がふらつき、危うく地面に倒れそうになった。

霖は彼に首輪とリードをつけ、部屋のドアを指さして

「ドアの前で座りなさい」と命じた。

「うっ……」

森朔のお尻にはこれほど太いものが咥え込まれているため、歩くにせよ這うにせよ、そう簡単には動けない。

特に今、霖に首輪を引っ張られながら命令されている状況では、森朔の脳裏に以前犯されていたさまざまな光景が浮かび上がり、肉穴が思わずけいれんし始め、ディルドをきつく咥えたままうごめき始めた。

渦巻く快感のせいで、森朔はますます身動きが取れなくなっていた。

「さあ、登れ！」

霖の声が厳しくなり、森朔のお尻に足を踏みつけた。言うことを聞かない雌犬を懲らしめるため、靴底で森朔のお尻を激しく踏みつけた。

その一撃で、森朔のお尻はさらにきつく締め付けられ、腹の中もディルドで激しく突かれた。

「ああ……！」

森朔は思わず喘ぎ声を漏らし、体が床に完全に崩れ落ちた。霖に太ももを軽く蹴られてようやくはいおきると、よつんばいになって入り口の方へと歩いていった。

足を力強く前へ踏み出すたびに、体内のディルドが膣の奥深くでくるくると回転し、もともと興奮していた淫肉がさらに激しく締め付けられ、より濃厚な快感が伝わってくる。

ところが、ペニスは尿道棒によって完全に塞がれており、欲望を晴らす場所がないため、淫肉をさらに強く締め付けて穴に挿入されたディルドを吸い込みそれによってわずかな慰めを得ることしかできない……

まさに悪循環だ。

ほんの数歩進んだだけで、森朔の息はますます荒くなっていった。

霖は、森朔の背後で楽しそうに振られている犬のしっぽを見つめ、彼の尻をもう一度蹴って、もっと速く這うよう促した。

ようやくよろめきながら部屋の入り口まではいより、霖の指示に従ってしゃがみ込んだ。

姿勢が変わったことで、森朔の体内に挿入されたディルドはすでに肉穴をぐちゃぐちゃに犯し尽くしており、興奮に染まった赤みが、彼の頬に広がっていた。

その様子を見て、霖はシリコン製の、骨の形をした口枷を取り出し、森朔に装着させた。ベルトを後頭部に回して固定し、彼がそれを噛んで緊張を解ける

ようにした。

エレベーターのドアが開いた瞬間、森朔の全身がこわばった。

霖はスーツケースを片手で引きながら、無理やり彼をエレベーターの中に引きずり込んだ。

エレベーターという異様に明るい狭い空間の中で、森朔の呼吸は荒くなった。

専用エレベーターだとしても他人と出くわすリスクはほとんどないが、この姿のままはい出さなければならないなんてやはり常軌を逸している……

もしものことがあったら？もし誰かが通りかかったら……

森朔は、自分の吐く息が熱を帯びていることに全く気づいていなかった。

犬のしっぽは上向きに立ち、興奮してびくびくと動いている。

心から嫌だったのに、霖に無理やり引きずられるようにエレベーターに押し込まれ、下半身は痛いくらいに硬くなり、いつの間にか乳首も硬く立ち上がり誰かに気づいてもらえるのを待ちわびていた。

エレベーターの中にしゃがみ込んだ森朔は、思わず歯を食いしばり、口の中にくわえた骨のおもちゃを犬歯で噛みしめた。

その興奮のあまり息も絶え絶えになっている様子が、霖にはたまらなく気に入った。思わず彼をからかいたくなり、ポケットから乳首クリップのベル付きを取り出し、しゃがみ込んで森朔に装着してあげた。

「うっ……」

鈴が鳴って、誰かに聞かれたら……